

第2章 シンポジウム 講演会



韓国の若者からみた日本文化

韓国同徳女子大学日本語専攻

助教授 尹 福 姫

はじめに

本日、私がお話する予定の講演は、「世界の中の日本文化」という大きなテーマのもと、「韓国の若者からみた日本文化」というタイトルにしてみました。私は日本文化の専門家でもないし、だからといって最近流行っている「韓流」、つまり韓国の大衆文化についてもよくわかっておりませんので、どんな話をしたらいいか、少々悩みました。

私の大学生の頃は、最近の若者のように自由に日本文化、しかも日本の大衆文化に接することができるなんて、とんでもない話でした。当時、日本の歌は禁止曲になっていまして、日本語科の学生として隠れて日本の歌を習ったり、歌ったりする時は肩身の狭い思いをしました。

また日本映画は日本文化院(広報館)を訪ねて週に一回、「男はつらいよ」を見るのがせいぜいのことでした。今のように、映画や歌を通して、あるいは漫画などを読みながら日本語を習ったりできる時代ではありませんでした。

今私は同徳女子大学で、4年生の「映像日本語演習」という授業を受け持っていますが、ここでは自由に日本の映画やアニメを見ながら日本語の表現を習ったり、映画の背景になっている日本文化、日本事情について習っています。学生たちは学校の語学センターからビデオを借りたり、インターネットを通して資料を集めて発表し、学生同士で討論しあったりしています。時々教師として私は、20数年前の自分の学生の頃を思い出して、世の中こんなに変わったな、と不思議に思ったりします。たぶん日本も韓国と事情は違ったと思いますが、80年代の前までは一部の人々を除けば韓国と韓国文化について、さほどの関心はなかったと思います。

1988年に韓国でオリンピックが開催されてから韓国の発展ぶりが世界各国に知られました。当時日本でも多くの人々が韓国についての新しい情報をたくさん得ることができたと思いますが、翌年の89年に私は東京のある小学校の5年の社会科の時間に招待されたことがあります。私だけではなく世界各国から多くの留学生が招待されて自国について紹介し、自由に質問を受ける時間がありましたが、ある男子生徒が手をあげて私に質問をしました。彼の質問は「韓国にも自動車がありますか」、「電話がありますか」ということから始まりました。当時は本当にショックを受けましたが、とにかく当時と比べると比較になれないくらい、今の韓国は日本で

よく知られています。

また、韓国の大衆文化は日本はもちろんホンコン、台湾、中国などで「韓流」ということばで呼ばれ、最近非常に人気を得ています。

「韓流」と「日流」

「韓流」という言葉は現在、韓国、日本、中国で同時に使われています。これは韓国で造られたことばではありません。英語では「Korean wave」と言いますが、他の外来語のように英語圏から来たことばでもありません。ご存じのように「韓」は「韓国」のことを意味し、「流」は「流れる」の意味で、漢字の本場である中国から生まれたことばです。より正確には1999年の11月2日に「北京青年報」に初めて紹介されたことばで、韓国の大衆文化及び韓国の芸能人に熱狂する中国の若者たちを指す新造語です。

日本では「冬のソナタ」というドラマが韓流ブームに火をつけたと思いますが、映画、ドラマ、音楽などの韓国の大衆文化はホンコン、中国、日本、東南アジアで韓流ブームを造成していますし、その影響力は中央アジアにまで拡散しています。韓国文化がアジア大陸の全域にわたって共有されるというのは一つの歴史的な事件であるかも知れません。これによって各国での韓国製品の人気上昇しているのはもちろん、韓国の衣食住の生活文化までがアジアに伝わっているのが現状です。

韓流は韓国において今や一つの文化産業になりました。韓流文化産業の主流をなしているドラマと映画の輸出総額は2000年以来着々と増加して、映画の場合、2001年には1120万ドル、2002年には1500万ドル、2003年には3100万ドルを、そして下の注の表にはまだ統計結果が乗っていませんが、2004年には6000万ドルにまで、急成長しています¹。

ドラマは2003年には4200万ドルであったのが、2004年に7500万ドルを輸出して映画よりも輸出額が大きいです。こうした韓流文化産業は最近の韓国内における全体的な文化産業の不況を埋めつくしてくれる経済的動因になっています。果たして韓流の実体は何であり、なぜアジアの人々にこれほどまで強烈にアピールするのでしょうか。これに関する研究が韓国内で最近活潑に行われています。

ところで、きょう私がこれからしようとする話は、このようなアジア各国で流行っている韓

¹ 韓国映画の輸出実績の変化

(単位：ドル)

年 度	1999	2000	2001	2002	2003
輸 出 額	5,969,219	7,053,745	11,249,573	14,952,089	30,979,000
増 加 率		18%	59%	33%	107%
作 品 数	75	38	102	133	164
作品当り価格	79,590	185,625	110,289	112,422	188,896

出典：「韓国映画の動向と展望」4月号（映画振興委員会、16p）

流ブームについてではなく、最近韓国の大学生を含む若者たちの間で静かに流れている「日流」についてです。

「日流」ということばはまだ「韓流」ほど、実際に韓国人の間で通用することばではありませんが、もちろん韓流に相對する概念として現れた、最近よく耳にすることばであります。最近「波のように押し寄せる日本文化」という表現が韓国ではよく言われていますが、まさに押し寄せる日本文化の波の中で10代、20代を中心に部分的に「日本マニア」が増えているのが現実です。彼らの関心は日本の漫画、アニメ、映画、ドラマ、歌など、多様な分野に渡っています。彼らを中心に日流は静かに広がりつつあります。

こうした日流現象の一例になるかと思いますが、若者の町である新村や明洞、江南などでは最近お店の看板に日本語を直接使用する店が急速に増えています。単純に日本語を韓国語に直した看板ではなく、日本語そのものを使用しているのです。今までは食べ物と関係のある日本語がほとんどでして、たとえば、「とんかつ」、「すし」、「うどん」、「カレー」、「ラーメン」などの日本語を直接看板に使用するのはもちろん、のれんまで下げて「今は営業中」、つまり日本の食べ物を今売っている、とPRする店も増えています。時々間違った日本語を書いてしまって「うどん」が「うとん」になったり、「カレー」が「カレ」になったり、「ラーメン」が「ラーメソ」になったりして、笑ってしまいます。

また、日本で通用する漢字をそのまま韓国式に読んで、韓国では意味の曖昧な漢字がそのまま流通していますが、たいした拒否感なく人々に受け止められている現象もおもしろいです。たとえば、「金壽司」「尹壽司」のように店のオーナーの名字を入れた寿司屋さんが増えていますが、以前、韓国では「壽司」という漢字はいわゆる「お寿司」（韓国では「초밥」と言います）の意味では決して使われていませんでした。少々大袈裟ではありますが、これからは「초밥」という韓国語がなくなるかも知れません。

話は変りまして、1997年に「かけはし」という名前で若者のよく集まる場所にオープンしたカフェーがありますが、ここは韓日両国の民間交流を目的で出来たお店で、韓国人はもちろん、韓国に留学に来ている日本人の留学生や在日韓国人などのよく集まるお店だそうです。私はまだ行った事はありませんが、最近韓流ブームに乗って日本からの観光客もよく立ち寄る名所となりました。ここを訪ねる日本人は韓国人の客を通して韓国語と韓国文化を、韓国人の客は彼らを通して逆に、生きた日本語と日本文化を学ぶことができ、お互いにとって人気のある場所となりました。

こうした韓国内における日流に火をつけたきっかけになったのが1998年以来推進されてきた、韓国政府による日本の大衆文化開放に関する方針です。次に日本の大衆文化の開放がどのような段階を経て行われたかについて、参考までに表で示してみました。

1998 10 08	金大中大統領「恐れを持たずに挑むものの段階的に」という日本大衆文化の開放方針を明言
1998 10 20 (第1次)	韓日共作映画や日本俳優の出演した韓国映画、4 大国際映画祭の授賞作、日本語版漫画とコミック誌

1999 09 02 (第2次)	政府が公認する国際映画祭（70余個）の受賞作、「全体観覧可」等級の映画（アニメは除く）、規模2000席以下の室内での一般歌手の公演
2000 06 27 (第3次)	「15歳入場可」等級の映画、国際映画祭で受賞した劇場用アニメ、一般歌手の公演（規模に制限なし）、日本語歌唱を除く残りのアルバム、ゲーム機用ビデオゲームを除くゲームソフト（PCゲームやオンラインゲームなど）
2001 07 12	政府、日本の歴史教科書問題や小泉総理の靖国神社参拝問題に対する抗議として「日本大衆文化の追加開放を無期限中断」と発表
2003 06 07	盧武鉉大統領「文化交流活性化のため日本大衆文化開放を拡大する」と明言
2003 09 16 (第4次)	映画、アルバム、ゲーム分野の完全開放（放送と劇場用アニメは補完措置をまとめた後、2004年1月1日に同時開放）

日本文化と韓国の若者

表に示されたように、日本の大衆文化は1998年の10月から公式的に韓国に紹介されたこととなりますが、実は1998年以前から日本の文化は韓国内に急速に広がっていました。私は日本での勉強を終えて1997年に帰国をしましたが、ある日、地下鉄に乗ったら一人の女性が村上春樹の「ノルウェイの森」の翻訳本を読んでいるのを見かけてびっくりしました。川端康成でもなく、三島由紀夫でもない、村上の作品が翻訳されていたなんて、驚きました。というのも高校の時、自家にあった世界文学全集の中に、唯一に入っていた日本の作品が川端の「雪国」と三島の「金閣寺」だったからです。

何日か経って本屋へ行ってみましたら、村上春樹はもちろん、山田詠美、吉本ばなな、丸山健二などの作品の翻訳がずらりと立ち並んでいて、彼らはすでに着実に韓国の読者を確保していたわけです。今日を生きる韓国の若者たちは文化開放のずっと前からすでに自分の関心分野を通じて各自の日本に慣れていたわけです。

日本の大衆文化が開放される前までの日本の作家たちの人気について、韓国内の一部では文化侵略に喩える見方もありますが、日本文化の流入に対して「浸透」または「侵略」ということばで表現したがる私たち韓国人の言語習慣から、また日本文化に対する無条件的な警戒心と反感から、もう自由になる時が来たのではないかと思います。文化開放を前後に、韓国内では実に様々な論争がありました。一方では文化界と青少年に及ぼす影響や経済に及ぼす悪い影響にかかわる否定的な見方がありましたし、もう一方では日本文化の開放は逆らうことのできない時代の流れであり、却って質の高い文化を收容することのできる良い機会だと見る見方の、相反した主張がありました。しかし、日本の文化が完全に開放された現時点から見ますと、こうした論争自体があまりふさわしくなかったと見る見方が圧倒的です。なぜなら、今だに多くの部分で自由でない大人たちとは違って、今日の我々韓国の若者たちはインターネットなどを利用した自由な情報吸収を通して、日本文化に開かれた姿勢で臨んでいるからです。

今現在、最も日流が実感できる場所として私は大衆音楽アルバムとDVDの売り場を挙げるができると思います。韓国の代表的な大型書店である「教保文庫」には、昨年 J-POP

コーナとDVDの専門コーナが設けられました。ここでは昨年7月6日に発売されたSMA Pのアルバムが、発売されて一週間目に100枚以上の売り上げを記録したそうです。これは音楽アルバムがあまり売れない韓国ではとてもめずらしい現象と言えます。

このような日流現象は主に1020、つまり10代、20代を中心に広がっていますが、必ずしも彼らに限った現象でもありません。10代や20代のこどもをもった親の世代もこどもたちの影響を受けたせいか、自然に日本に対する関心が高まりつつあります。親の世代はまず、歌や映画などを通してよりは日本の食べ物を通して、日本文化に接する機会が多いようです。最近の韓国の百貨店ではお寿司、納豆、うめぼしなどの日本食はもちろん、その材料までも自由に購入することができます。

ところが、最近韓国には前から日本の社会が抱えている様々な問題、たとえば、いじめ、自殺、引き籠もりなどの問題がそのまま再現される傾向が見えます。

あまり自慢したくない話ですが、先月発表された統計によりますと、韓国の自殺率は2004年現在、日本に次いで世界4位を記録しました。これは2003年の統計をもとにした記録で、2002年から2003年にかけて起きた自殺は前の年に比べ、増加率の面でOECD国家のうち、最大増加率だそうです。最近では有名な社会人や芸能人の自殺が報道されてから、特に中学生や高校生、さらには小学生の自殺が目立つようになりました。自殺の原因は年齢によって違いますが、青少年の自殺は学校でのいじめや成績の落ち込みによるストレスが原因であることが多いようです。韓国は日本以上に大学入試が厳しく、「入試地獄」という言葉があるほどです。

また、引き籠もりが最近の日本の社会問題になっているという、NHKの衛星放送を何年前か見たことがあります。これは日本にだけある特異な現象であるとばかり思っていましたら、韓国でも最近この引き籠もり現象が現れるようになりました。

留学生の頃、私は日本のいじめについて自分なりに思った事をまとめて、どこかでお話をした事があります。その内容を要約してみますと、「韓国にはいじめがない。いじめられる前に両親や教師と相談をして助けを求めるから、日本でのような形のいじめは絶対ありえない」と断言しましたが、今になってみると私は嘘をついた結果になりました。学校でのいじめ、職場でのいじめ、……。様々な形のいじめが最近話題になっています。つい先週は同僚にいじめられた一人の若い兵士が銃を乱射して、8名の若い兵士が死亡する衝撃的な事件が発生しました。今や韓国では「いじめ」という日本語がそのまま通用しています。

このような若者の社会で起きている様々な問題を、ただ単に日本文化の影響であると見たら大間違いです。こうした現象はたいてい、現代の日本社会、あるいは現代の韓国社会が孕んでいる様々な問題点が複合して引き起こされた現象であると思います。消費文化の最先端を生きる若者たちの姿、情報環境の急激な変化に起因する情報行動の変化、これに伴う意識の変化、規範感覚の変化、また個体化現象などが韓国と日本に共通する現代社会の問題点として指摘されるでしょう。

おわりに

文化の国際化は今日、世界的な傾向です。全世界どこであろうと、インターネットを通じて情報吸収が可能になったこの時期、文化の完全な閉鎖は不可能です。西欧の文化は、それが西欧のものであるからではなく、それなりの必然性—たとえば、それが先進国のものであるとする、そのためより高いレベルの文化に接したいと願う私たちの知的欲求を充たしてくれるという必然性—を持って我々と出会うように、今日の日本文化もやはり日本のものであるからではなく、先進国のそれとして、または我々よりある意味では条件のよい隣の国のものとして、流入されているという事実をまず確認しておくべきです。

これからもおもしろさと感動(これらは大衆文化が消費されるための必需条件だと思います)を追求する韓国の若者たちは日本の文化に心を奪われるでしょう。それが文学であろうと、漫画であろうと、映画や歌であろうと、とにかく日本の文化が韓国の若者に引き続きおもしろさと感動を与える限り、韓国の若者たちは日本文化を追い求めるでしょう。逆に日本の文化からこれ以上おもしろさと感動を得ることができなくなったら、彼らは未練なくそれに対する関心を捨てると思います。

文化開放をきっかけに、これからの韓国と日本は、より一層近くなるべきです。これまで「近くて遠い国」という表現がよく言われましたが、今後は互いの文化、社会間の深い交流を通して距離的な近さだけではなく、心理的にも近さを感じる両国になってほしいです。

世間では政治家たちが韓日関係をだめにすると言ったりしますが、日本語を教える立場の教師として、「それは本当かも知れない」と、たまに思う時があります。韓日関係はまだまだとてもデリケートな面がありまして、歴史教科書問題などが生じる度に、大学で日本語を専攻として選ぶ学生の数が一段と減ってしまうような気がします。私供の同徳女子大学は現在学部制になっていまして、1年の終わりに学科を選ぶことになっています。定員は60名ですが、定員の150%までは学生を受け入れる事ができます。今まではほとんど150%、つまり90名の学生が入りましたが、今年初めて定員にも達しませんでした。もちろん後日、人数が再調整され、70あまりの学生が入りましたが、学科で分析した結果としては、やはりいろいろな原因が予想される中で、最近の韓日関係をめぐる否定的な報道も原因の一つではないかと思います。

今同徳の話をしてしましたが、ついでに韓国における各大学の日本関連学科の設置現況について若干付け加えて、きょうの私の話を終わりにしたいと思います。

1960年代の2個所の大学を先頭に、70年代の半ばから急速に増加して80年代まで48個所の大学に日本語学科が設けられ、2000年以降も引き続き新設され、現在私が調査したところによりますと、全国104の大学に110の日本関連学科が設置されています。こうした学科では日本語を中心に、日本との国際関係、通商貿易などを教える学科も多いようです。

これから将来は日本の大衆文化はもちろんのこと、より体系的に日本について研究していかなければなりません。そのために各大学の日本関連学科の活躍が期待されるところです。今よりもっと多くの学科が設けられる必要性に先立って、まずすでに存在している学科を中心に内実を期する必要があると思います。

今後は韓国と日本が両国の大衆文化の交流にとどまることなく、互いの有益な文化を積極的に受け入れるべきです。また自国の優秀な伝統文化と現代文化を相手の国に紹介し、それによって一層自国の文化を繁栄させ、さらに人類文化の進歩にまで貢献できる土台を築いてほしいという願いを込めて本日の私の講演を終わりに致します。ありがとうございました。